

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	絵本で考えるデス・エデュケーション : 平和学習とともに
Author(s)	木村, 敦子
Citation	HABITUS , 26 : 135 - 148
Issue Date	2022-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/52158
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052158
Right	
Relation	



絵本で考えるデス・エデュケーション

——平和学習とともに——

木村敦子

(広島大学大学院文学研究科博士課程前期2年)

はじめに

幼児はまわりの環境とのかかわりを通して成長していく。そして、自然を通して、いのちに触れはじめるが、その幼児には、いのちのおわりをきちんと教えてはいないよう見受けられる。いのちには限りがあることを教えることで、いのちの大切さを説くことが重要である。しかし、幼い子どもに死について教えるのは残酷だと考える人もいるであろう。しかしながら、ペットの死、著名人の死、ニュース、テレビ、ゲームのなかの死、祖父母の死など、死は身近ないたるところにある。死から子どもを引き離して育てることはできない。死への誤ったイメージや誤解を防ぐためにもデス・エデュケーションが有効であろう。死について自由に話せる環境があれば、子どもの助けとなると筆者は考える。残念ながら、日本では幼児にデス・エデュケーションがほとんど実施されていない。そこで、幼児へのいのちの教育としてのデス・エデュケーションの導入について考察することを本論文の目的とする。では、どのように幼児に死について教えたらいいであろうか。そこで、本論文では、子どもを怖がらせることなく、自然に死を伝える方法を考えるために、ヒロシマの幼児への平和教育を探求した。デス・エデュケーションを実施するに際し、その平和教育の方法が、死を見つめ、いのちの大切さを考えるうえで、参考になると筆者は考える。

1. ヒロシマの幼児への平和教育の理念

平和教育のはじまりは、1945年にロンドンにおいて作成されたユネスコ憲章に見られる¹⁾。その憲章の前文に「戦争は人のこころのなかで、生まれるものであるから、人のこころのなかに、平和のとりでを築かなければならない」という有名な言葉がある²⁾。これは、戦争を避けるためには、人のこころを育てていかなければならないということを表しているのであろう。そして、二度にわたる世界大戦を、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義を広めた戦争であると述べている。さらに、戦争の原因として、相互の風習と生活を知らないことが、諸人民の間に疑惑と不信を起こしたことを挙げている。戦争を防ぐためには、文化の広い普及と正義・自由・平和のための教育が欠かせない。そして、すべての国民が相互に援助し、相互に関心を持つ精神を持たなければならない。このような理由により、すべての人に教育の充分で平等な機会が与えられること、客観的真理が拘束を受けずに探求されること、かつ、思想と知識が自由に交換されることにより、国際平和と人類の共通の福祉が促進されるために、ユネスコを創設したと述べられている³⁾。このように第二次世界大戦以降、ユネスコは、平和を維持するためには国際理解の教育、とくに異文化の理解をはかることが必要であることを強調し、教育を推進したのである。日本の平和教育もこの思想のうえに立って、進められてきた。

ヒロシマの幼児への平和教育を主導したのは、教育学者・広島大学名誉教授の藤井敏彦(1934-2008)である。藤井は平和教育を以下のように捉えている。

平和教育が人類の教育上の共通課題として登場したのは、第二次世界大戦後のことである。なぜなら、第二次世界大戦において、戦火が世界的な規模に拡大し、アウシュビッツでのユダヤ人虐殺にみられる人間の尊厳性を

崩壊させる残虐な行為などの凄惨な出来事が起きたためである。さらに、人類がヒロシマ・ナガサキへの核兵器の使用によって幕を開けた核時代を迎えたことで、戦争観が根本的に転換され、地球規模で平和のための教育が課題となった。また、核戦争による人類破滅の危険が環境保護教育にも目を向けさせた。つまり、大気汚染、酸性雨、森林乱伐、核実験、原発事故による放射線障害、海洋汚染などの急速な地球環境の悪化もまた、人類の平和な生活を危機にさらしているということで、平和教育の視点からも大きな問題として取り挙げるようになった。このような歴史的・社会的背景をもとに展開される平和教育は、各民族、各国、各学校によって多様であり、それぞれに特色があり、さまざまなテーマが取り挙げられている。たとえば、核兵器の縮小や廃絶などの軍縮、けんかの平和的解決、戦争体験、飢餓、貧困、差別、人口問題、発展途上国の開発の問題など、多彩である。⁴⁾

藤井は、このようなさまざまな平和教育を平和概念に応じて分類している。戦争がない状態を平和と規定する「消極的平和概念」と、物心や心身両面で正義が実現された状態でなければ平和とは言えないと考える「積極的平和概念」である⁵⁾。また、戦争と平和の問題を取りたてて扱う「直接的平和教育」と、平和的心情や平和的精神の形成を主眼とする「間接的平和教育」に分け、間接的平和教育は、直接的平和教育の土壌づくりをする役割を持ち、両者は深く結びついているという⁶⁾。藤井は、平和教育は、深い人間愛に支えられた平和的な精神や心情を育てることを通して、平和を愛好する人間や社会を創り出す仕事であると主張している⁷⁾。そして、藤井によれば、日本の平和教育の特色は、戦争体験の継承、特にヒロシマ・ナガサキの被爆体験の継承が中心となっていることである。また、被爆体験を語るということは、単なる過去の戦争の継承

とは異なり、二度と核戦争を起こしてはならないという人類の未来への警告なのであるという⁸⁾。そして、藤井は、幼児期の平和教育の目的は、乳幼児の感情の世界を平和の精神、人間への深い愛と信頼の精神、ヒューマニズムの精神で満たすことにあると主張している。それゆえに、幼児期の平和教育においては、間接的平和教育の占める比率が大きいことが特質であると述べている⁹⁾。そのため、幼児には、世界や他の人間に対する肯定的・積極的イメージをつくりだし、情動的な安定感を育てながら、そのうえに戦争の破壊的、否定的現実を知らせていくべきであると繰り返し述べ、子どもの発達段階と照らし合わせて、直接的平和教育を実施する必要を強調している¹⁰⁾。

2. 幼児への平和学習の実践に学ぶ

ヒロシマの幼児への平和教育の実践においては、保育者は、戦争の悲惨さについて、絵本や紙芝居を使って、子どもに直接的に働きかけている。絵本を使う理由として、「絵本は、体験をより確かなものにし、空想の世界を豊かにイメージし、ふくらませ、また、みんなで共感、感動しあえるもの」¹¹⁾として、普段の保育でも重視されているということを挙げている。また、絵本を効果的に使っている。つまり、絵本を読み聞かせることによって、まず絵画表現につなげ、次に視聴覚化やリズム化する劇にし、そして歌を創り、また紙芝居制作へと広げている。このような平和教育は、子どものこころに永続的で深い印象を残し、平和に対する豊かな情操と想像力を育て、人間形成のうえでも大きな影響を与え、共同で取り組めるものとして高く評価されている¹²⁾。

筆者は、2019年10月27日に開催された、広島県保育団体合同研究集会の「乳幼児期の平和教育」分科会に参加した。そこでは、毎年8月の第三週木曜日に開かれている「平和部会」の報告が行われた。平和部会は、「どのように子どもたちに平和を、戦争を伝えているか」についての取り組みを発表しあい、

学びあうことを目的に開かれている。また、絵本が毎年出版され、種類が増えていることから、絵本研究をするために、絵本を持ち寄り、話しあっている。そこで発表された取り組みのうちの二つが、10月に発表された。この10月の分科会では、発表された取り組みについての感想を述べあい、参加者の平和についての取り組みが紹介され、平和教育をするうえで、使用してみてよかった絵本の推薦があった。推薦された絵本は、『へいわってどんなこと?』、『8月6日のこと』、『伸ちゃんのさんりんしゃ』、『トビウオのぼうやはびょうきです』、『ぞうれっしゃがやってきた』、『さよならカバくん』、『おりづるの旅—さだこの祈りをのせて』などである¹³⁾。平和教育を実施するにあたり、子どもたちに適した絵本は何か、と探求していることがわかった。

また、2019年8月6日に筆者は、広島県熊野町ひかり学園で4歳児から6歳児に実施されている平和学習を見学した。ひかり学園では、7月下旬から絵本『8月6日のこと』と『へいわってすてきだね』¹⁴⁾を絵本の棚の一番上に飾り、子どもたちがいつでも手に取って読めるようにして置いてあった。それらを読んでほしいと保育者に頼んでくる子どもには読み聞かせをしていた。また、保護者に園日より8月6日には原爆について子どもたちに話すことを事前に知らせ、「平和の大切さを小さい子に教えるのはまだ難しいと思われるでしょうが、ご家庭で飼育している昆虫や金魚などを例に、身近なところに見られる、いのちの大切さについて話をし、語りあう場にしてほしい」¹⁵⁾というメッセージを伝えた。8月6日の朝、全員が登園して落ち着いたところで、「今日は何日ですか。何の日か知っていますか」という園長先生による問いかけからはじまった。園長先生は「原子爆弾が広島に落とされて、多くの人が亡くなりました。そのことを忘れないようにしようねという日です」という説明をし、「目をつぶって、手を合わせて、お祈りしてくれるかな」との声かけをして、一同は1分間の黙祷をした。その後、保育者が紙芝居『ちっちゃいこえ』¹⁶⁾を子どもたち

に読み聞かせた。黒いネコが主人公で、原爆によって、そのネコの身体の細胞が変化した様子を描くことを通して、原爆の恐ろしさを伝えている。同じ構図にもかかわらず、明るい色の場面から白黒の場面へと色の変化のみで表現するという描写方法に、子どもたちは、一瞬息をのみ、敏感に反応していた。紙芝居の読み聞かせの後、保育者は、「何かを感じたり、思ったり、考えたこと、いつでも先生にお話してね」と子どもたちに声をかけていた。毎年、同じ取り組みがなされているとのことだった。子どもたちには、理解が難しいところもあるようだが、わからなくてもよいから、繰り返し語ることが重要であり、そして、子どもたちがいつでもまわりの人と疑問に思うこと、感じることなど、何でも話せる環境を保つことが大切だということであった。

また、2019年6月から2020年2月まで筆者は、広島県内の保育園ひかり学園、まこと学園、そして、サムエル東広島こどもの園の3園で、平和教育のために、どのような絵本が蔵書され、使われているかを調査した。3園の調査結果から、平和教育のために、さまざまな絵本が所蔵されているのが見られた。原爆や戦争を取り挙げている絵本のほかに、いのち、食物、誕生、成長、健康、病気、老い、死、悲嘆、障碍、環境破壊、震災、交通安全、ペットロス、平和など、取り扱っているテーマは多岐にわたり、幅広く所蔵されていた。子どもたちがさまざまなものに触れ、考えられるように配慮されていた。子どもたちに原爆について伝えるためには、前述の藤井による基本的平和教育の考えにあるように、まず、いのちの大切さについて教育し、その土台のうえに立って、戦争、死、国際理解など幅広く教える必要があるため、広い視野から絵本を選んでいるものと考えられる。

3. 平和教育は「いのちの教育」

平和教育がこのように推進され、広がる過程において、さまざまな批判が投

げかけられている。批判のひとつは、平和教育は特別な教育であり、幼児にはその発達段階からみて、戦争や平和の問題は難しすぎるというものである。また、戦争について教えることは乳幼児に不安や恐怖心を与えるという批判もある。さらに、保育そのものがいのちを育む平和教育そのものであるから、ことさら戦争や平和の問題を取り扱う必要はないという批判もある¹⁷⁾。藤井は、こうした問題を検討するときに留意すべきことは、「戦争に反対し、平和を守り築くということは、核時代の人類に共通かつ最高のモラルであり、平和的人間の形成は現代教育の原点となっている、いやなるべきである」¹⁸⁾と指摘している。そして、「幼児教育から生涯教育を含むすべての教育において、平和を愛する人間を教育することは、現代において不可欠の教育目的となっている」¹⁹⁾と主張する。幼児期の子どもにとって平和教育が難しすぎるという意見、幼児に不安や恐怖を与えるという考えに対して、藤井は、幼児期にふさわしい平和教育の内容と方法について理解が不足していること、幼児の固有な認識構造の特質を見逃していることに起因していると反論する²⁰⁾。つまり、乳幼児は、大人が不用意にする行為や発言を敏感にとらえ、無意識に吸収し、感情の奥底に沈殿させている。また、乳幼児は、周囲のものごとや影響を鋭い感性で捉え、全身で受け止めている。そのため、乳幼児期の発達段階に適した内容や方法で実施される平和教育が必要なのだと説く²¹⁾。また、戦争を教えることが幼児に恐怖心や不安を与え、ひいては人間不信の気持ちを植えつけるのではないかという危惧に対しては、藤井は、戦争は怖いものであり、決して英雄的なことがらではないという価値観を幼年期から育て、戦争とは反対に平和はよいこと、平和のために多くの人々が努力していることを知らせるといった観点に立って取り扱うなら、幼児に不必要な恐怖心や不安を与えないですむと考えている²²⁾。

また、ヒロシマの幼児への平和学習が広がったのは、1988年に全国保育問題研究協議会主催、第27回全国保育問題研究集会で、平和教育の分科会が新設

され、今日まで毎年、開催されていることに起因すると言えるであろう²³⁾。そして、藤井がこの分科会の運営委員として1988年から1998年まで毎年、平和教育についての理論学習のオリエンテーションを行ったことにもよるであろう²⁴⁾。その全国保育問題研究会の平和教育の分科会は、平和教育を実施するうえでの留意点として、以下のことを挙げている²⁵⁾。

- ①乳幼児期の心を平和の精神で満たす。親、保育者との信頼関係、安心感を育てる。
- ②日常の保育を、0歳から各年齢のポイントを押さえ、系統的に積み上げていく。
- ③集団づくりのなかで、民主的な人格の基礎を育てる。暴力によらずに、話しあいを通して問題を解決する能力を養う。どの子どもにも意見の表明権がある。子どもが主体的に学びとることができるように、教材を選び、方法を工夫する。
- ④平和の大切さを戦争と対比させて学ぶ。
- ⑤子どもに恐怖心を与えすぎることのないように注意する。年齢に応じた教材。大人や仲間への信頼感のなかで乗り越えていく力を育てる。
- ⑥子どもたちの意欲的な表現力・行動力を育てる。線画、歌、劇づくり、紙芝居づくりを実施。
- ⑦保育者の集団・保護者・地域の人々とともに学びあう。

このように、幼児への平和学習は、細心の注意をはらって実施されていることがわかる。選択されている絵本は吟味されており、常に子どもに恐怖心を与えないように保育者同士は意見を出しあい、教材を研究している。筆者が8月6日に見学した園でも、読み聞かせを行ったとき、いつでも保育者に感じたこと、思ったことを子どもたちが言えるような雰囲気、包容力をもった態度で接していることが見受けられた。

平和学習で使用されている絵本では、原爆や戦争が取り扱われているが、これらの絵本のなかで原爆や戦争を表すとき、当然のことながら、動物や人の死が描かれている。しかし、その表現は、死を怖がらせないように、生々しさを感じさせないように、たとえば、動物が眠っているかのように横たわっている姿で描かれたり、人がデフォルメされて顔は描かれていなかったりするなど、残虐性を感じさせないように配慮されている。このように、子どもが死を自然に理解できるように絵本が使用されている。そして、平和学習においては、いのち・誕生・友情・共感・死・悲嘆など多岐にわたるテーマの絵本が取り挙げられている。平和教育は、いのちのはじまりから死までを含む、幅広い視点で平和について子どもたちに教えており、「いのちの教育」と言えるであろう。藤井は、平和教育を、「過去への懺悔でもなく、未来への単なる祈りでもなく、明日の日にむけて、今日をどう生きるかの教育」²⁶⁾であると述べているが、その点において、平和教育は、いかに生きるかを問いかけ、学びを深める教育であるデス・エデュケーションとつながっていると考える。デス・エデュケーションを実施するにあたり、これまで見てきた、絵本の読み聞かせを通して平和について考えさせる幼児への平和教育の方法には、学ぶべきことが多く、共に実施することができると思う。

おわりに

ヒロシマの幼児への平和教育が原爆についてのみ教える特別な教育ではないように、デス・エデュケーションも、決して特殊な教育でも、死だけを教えるものでもない。ヒロシマの幼児への平和学習においては、子どもの情緒的安定感を育て、子どもの発達段階に照らし合わせたうえで、直接的に戦争や原爆に言及しているように、デス・エデュケーションの実施の際にも、豊かな人間性を育んで始めて、死を見据えたいいのちの教育が可能になると考える。そのよ

うな感性を育てるためには、絵本がひとつの方法として適していると考ええる。

幼児にいのちのはじまりと終わりを教えるとき、まず何よりも幼児自身がまわりの大人からの愛情を感じ取り、信頼関係を築いていることが大切である。特に死について言及する場合は、喜怒哀楽の感情が育っていて、自らの感情を率直に吐露し、表現できるようになっていることが望ましいのではないか。そのような感性が豊かに育まれた土台の上にデス・エデュケーションはなし得ると考える。

幼児へのデス・エデュケーションは、絵本の読み聞かせを通して行うのが適している。絵本は、基本的には、大人が子どもに読んであげるものである。子どもにとって、絵本はだいたいいつも手に届く、身近なものである。大人に絵本を読んでもらう時間はとても楽しく、子どもはこころ待ちにしている。絵本の読み聞かせには、家庭で読んでもらう場合と、保育園・こども園・幼稚園などの施設で保育者に読んでもらう場合とがある。家庭で読んでもらう場合は、大人の膝に座り、一対一で、落ち着いて読んでもらうことができ、その絵本が気に入れば、何回も読んでもらうこともできる。たとえお話が怖いものだったとしても、親のひざの温もりを感じているので安心感をもって聞くことができる。そのうえ、耳からはいつも聞きなれた保護者の声が聞こえてくるので、目の前の絵の世界にこころおきなく没入できる。「おしまい」の言葉で現実の世界に戻ってきたあとも、読み手に何でも話せるし、話を聞いてもらえ、受け止めてもらえる。それは愛情のこもった体験と言えるであろう。他方、保育者に絵本を読んでもらう場合は、いつもともに過ごしている集団のなかで絵本を聞いて、見て、おしゃべりする。友だちがおもしろい反応を示したり、感想や意見、または体験を話したりすることもあり、自らも何かを言うこともできる。子どもたちは、絵本に共感し、お互いに刺激しあい、影響しあっている。つまり、みんなで体験を共有しながら読んでもらう楽しさがある。もちろん、子どもが

絵本をひとりでめくりながら読むということもあろう。絵本の挿絵はたとえ文字が読めなくても内容がわかるように描かれている。子どもは絵本を読んでもらっているとき、耳から入ってくる言葉を聞きながら、絵を手がかりにして話を理解しており、絵を極めて細部までよく見ている。

幼児へのデス・エデュケーションは、死について描いている絵本をいきなり用いるわけではない。まずは、幼児にとって身近なことから、つまり、いのちの誕生、自分自身が生まれた日のことから学び、次いで、自分の身体、健康、日々口にする食べ物について学ぶ。それから、昨今頻発している自然災害から身を守ることを考えることは自ずといのちについて考える機会となるため、安全・防災に関することも学ぶ。そのあと、幼児のまわりの世界にある、自然の移り変わりや植物の循環、昆虫や動物の生命について学ぶことへ進み、さらに、人の病気や老い、親しい人との離別、自分自身の死、死別後の悲しみの学びへと無理のない自然な流れで進めるのがよいと考える。

最後に、「いのちの教育」を発展させ、より豊かな教育へと導くために、デス・エデュケーションとともにヒロシマで行われているような平和学習が実施される必要があると考えられる。なぜなら、自然環境からだけではなく、平和の精神を通して、いのちの大切さを学ぶことができるからである。それは、ヒロシマの平和学習が持つ学習範囲の幅広さが、「いのちの教育」に広がりを持たせることにつながる。たとえば、国際理解を深めるために、文化や言語などの違いを説明する絵本、世界地図や国旗などを説明する絵本によって、世界について広く学ぶことになる。また、環境破壊による影響を学ぶことで身体やいのちについて深く考えることになる。さらに、友だちとの関係においても、平和的に、暴力によらずに解決をはかる人間関係を教えることにもなる。それゆえ、「いのちの教育」でもある平和学習をデス・エデュケーションとともに実施すれば、より豊かな教育になると筆者は信じる。

註

- 1) ユネスコ憲章（インターネット URL=<https://www.mext.go.jp/unesco/009/001.htm>
2021年3月2日閲覧）
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 藤井敏彦「幼児期の平和教育 —その構造・現状・課題—」日本乳幼児教育学研究編集委員会編『乳幼児教育学研究』Vol.2、日本乳幼児教育学会、1993年、10頁
- 5) 同上、10頁
- 6) 同上、10頁
- 7) 同上、10頁
- 8) 同上、11頁
- 9) 同上、12-13頁
- 10) 同上、14頁
- 11) 竹村ともみ・古山節子（浜松たんぼぼ保育園）「幼児期の平和教育分科会提案—平和教育を位置づけて」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.109、新読書社、1988年、303頁
- 12) 宗藤尚三編著『子どもの心に平和のとりでを —幼・低学年と両親への平和教育—』汐文社、1982年、69頁、参照
- 13) 浜田桂子作・絵『へいわってどんなこと？』童心社、2011年、中川ひろたか作、長谷川義史絵『8月6日のこと』河出書房新社、2011年、児玉辰春作、おぼまこと絵『伸ちゃんのさんりんしゃ』童心社、1992年、いぬいとみこ作、津田櫓冬絵『トビウオのぼうやはびょうきです』金の星社、1982年、小出隆司作、箕田源二郎絵『ぞうれっしゃがやってきた』岩崎書店、1983年、早乙女勝元作、鈴木善治絵『さよならカバくん』金の星社、1988年、うみのしほ作、狩野ふきこ絵『おりづるの旅—さだこの折りをのせて』PHP研究所、2003年

- 14) 安里有生詩、長谷川義史絵『へいわってすてきだね』ブロンズ新社、2014年
- 15) 『ひかりだより 8月』第13号、保育所ひかり学園、2019年7月31日発行
- 16) アーサー・ビナード脚本、丸木俊・丸木位里作「原爆の図」より『ちっちゃいこえ』童心社、2019年
- 17) 黒川久美「保育のなかの平和教育—『乳幼児教育の平和教育』分科会のなりたちに遊んで」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.276、新読書社、2015年、19頁、参照
- 18) 藤井敏彦「幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.138、新読書社、1992年、16-17頁
- 19) 同上、17頁
- 20) 同上、17頁
- 21) 同上、17頁
- 22) 同上、17-18頁、参照
- 23) 谷中公子「幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.170、新読書社、1998年、43頁、参照
- 24) 瀧口美智代「幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.179、新読書社、1999年、120頁、参照
- 25) 石川秀子「乳幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.296、42-43頁、Vol.299、147頁、新読書社、2019年、参照
- 26) 藤井敏彦「平和教育をどうすすめるのか」日本平和教育研究協議会編『季刊平和教育』Vol.1、明治図書出版、1976年、18頁

参考文献

- 石川秀子「乳幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.296、Vol.299、新読書社、2019年

黒川久美「保育のなかの平和教育—『乳幼児教育の平和教育』分科会のなりたちに遡って」

全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.276、新読書社、2015年

全国保育問題研究協議会編『こどもの心に平和の種子を —乳幼児期の平和教育—』新読書社、2001年

瀧口美智代「幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.179、新読書社、1999年

竹村ともみ・古山節子「幼児期の平和教育分科会提案—平和教育を位置づけて」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.109、新読書社、1988年

『ひかりだより 8月』第13号、保育所ひかり学園、2019年7月31日発行

藤井敏彦「平和教育をどうすすめるのか」日本平和教育研究協議会編『季刊平和教育』Vol.1、明治図書出版、1976年

藤井敏彦編著『幼児期の平和教育』さ・さ・ら書房、1978年

藤井敏彦「幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.138、新読書社、1992年

藤井敏彦「幼児期の平和教育 —その構造・現状・課題—」日本乳幼児教育学研究編集委員会編『乳幼児教育学研究』Vol.2、日本乳幼児教育学会、1993年

宗藤尚三編著『子どもの心に平和のとりでを —幼・低学年と両親への平和教育—』汐文社、1982年

谷中公子「幼児期の平和教育」全国保育問題研究協議会編『季刊保育問題研究』Vol.170、新読書社、1998年